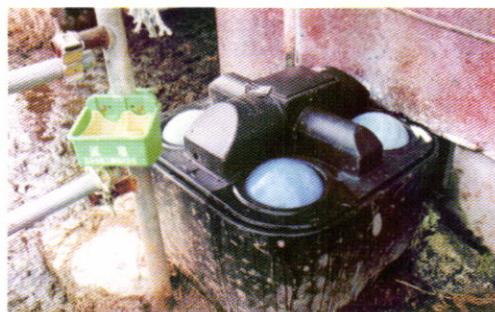


## 凍結対策事例

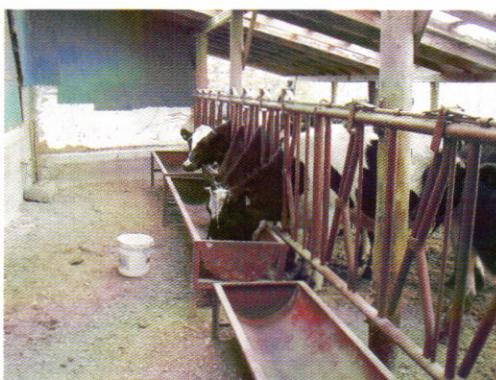
地熱利用型の非凍結給水器です。多くの牛が飲めるように設置します。給水機周辺は泥濘化しやすいので、高台に設置し、こまめに除糞します。



フリーストール育成舎に設置した、電熱型の非凍結給水器です。給水器は最低180度の角度から飲めるように設置します。袋小路への設置は厳禁です。

## 捕定施設

捕定施設は配合飼料給与、検診、授精等を行う時にあると便利です。主として連動スタンチョンを利用する事になりますが、効果的に牛を捕まえるためには、追い込みやすい牧柵の配置、及び首が支点より下がるような深い飼槽の構造が必要です。



連動スタンチョンの機能を発揮させるには深めの飼槽を設置します。連動スタンチョンの両脇には柵を設置し、追い込みやすくします。



連動スタンチョンは牛を捕まえるのには好都合ですが、飼槽全面への設置は採食量の低下を招きます。

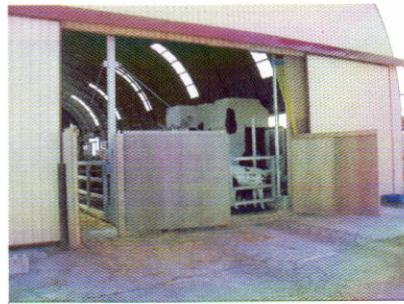


放牧地やパドックで牛を捕まえるには、写真のような移動式の連動スタンチョンが有効です。このスタンチョンはトラクターでけん引したり、ローダーで釣り上げて移動します。価格は20万円。

## ほ育、育成舎の扉・ゲート

施設を作るときには、作業がしやすく、目的に合った管理が出来るかが焦点となります。扉やゲートにちょっとした工夫をすることで、使い易い育成舎に改造することができます。

### 扉

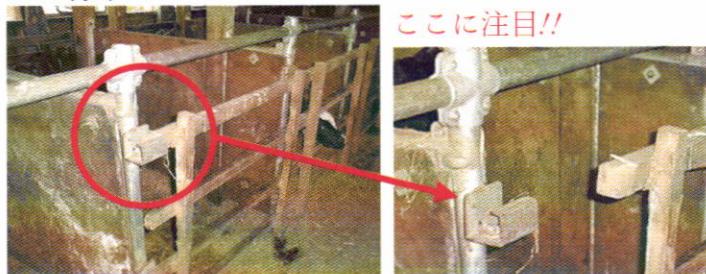


この施設は開閉口を大きくとっています。外側の扉は施設にあわせて丸くなっています。暴風時に戸が壊れないようになっています。

これは、出入り口の下の板が動きます。この板により、牛に直接風があたるのを防ぎます。また、この3枚の板により、風の量が調整できます。

### ゲート

#### ・ほ育牛ペン



受け金具の手前が曲がっていることにより、中にいる子牛が押し上げようとしても、この扉は持ち上がりません。除糞時や子牛の出し入れの時は、簡単に扉を外すことが出来ます。



この溝があることによって、扉を上げておくことができます。除糞作業や移動が楽に行えます。

側面に板をはると、子牛同士の吸い合いや、疾病的感染防止になり、なお良いでしょう。



左の写真は、成牛舎の内部を足場用のパイプで区切り、ほ育施設にしたもので(4頭分、約¥15,000)。

この事例では、出入り口のゲートはかんぬきで固定できるようにしておいて、個体の移動や除糞作業などで中に入る場合、ゲートの開閉や固定が簡単に出来ます。写真のように、かんぬきと支柱を鎖でつないでおけば、かんぬきの紛失を防ぐことができます。